

1人が始めなければ 何も生まれえない

思い悩んだ末、たどり着いた結論は「1人が始めなければ何も生まれえない」だった。2005年1月に外務省を退職し、スーダンの医師免許を取得。妻と3人の子供を残し、再び現地に乗り込み活動を再開した。その後、同調した出身校の仲間などと共に、2006年NPO法人「ロシナンテス」を設立。ロシナンテスの名前の由来は、理想を追って旅に出る小説「ドン・キホーテ」に出てくるドン・キホーテの乗る痩せ馬(ロシナンテ)から来ている。「自分1人は小さな痩せ馬。でも仲間が集まれば大きな力になる」との意味を込め、複数形にした。「ロシナンテス」は2006年に内閣府

の患者さんを診ている。また、その活動は医療にとどまらず、女子への教育の不備を見て、女子の小学校建設や、老朽化した水施設の改修作業も行った。村にそれぞれの管理委員会を作り、彼らと共に運営に携わっている。さらに、「子供たちにワールドカップの夢を」とサッカー教室の開校、チームへのサポートなどの支援を行っている。また、日本の学生や若手医師をスーダンで、スーダンの医療関係者を日本で研修するなど交流事業を行っている。定期的に帰国し、大学から小学校までの教育現場を中心に講演を行い、人々に大きな影響を与えている。

川原尚行氏は、20年以上続いた内戦やマラリアなどの感染症で国民の多くが苦しみ、国全体が疲弊しているアフリカのスーダン共和国で、医療を中心に様々な活動を精力的に行っている。活動のきっかけとなったのは、2002年外務省医務官としてスーダンに派遣された際、多くの子供たちが命を失っていくのを目の当たりにし、「どうにかして助けたい」と強く願ったが、外務省医務官として診療できるのは原則として大使館員とその家族のみだった。「現在の自分の立場では何もできない。かといって現状を見たまま立ち去ることはできない」と1年以上

に登録、スーダン政府からも国際NGOとして登録されている。しかし、その活動は手探りからのスタートだった。最初の年は、首都ハルツームの病院で働き、翌年は国内の無医村を巡回診療した。2007年4月「腰を据えて患者を診たい」とシエリフ・ハサバツラ村に診療所を開設した。ところが診療所には、電気も水もなかった。そこで、村人の協力を得て、日本から持ち込んだ太陽光発電装置を設置し、電気を賄った。さらに、古井戸を修理し、水路を引き、水を確保した。その後も環境を整備し、現在では、スーダン人スタッフらとともに1日30〜40人



■ロシナンテス会報誌、活動紹介パンフレット



■スーダン共和国で巡回診療を行う川原氏/1



■スーダン共和国で巡回診療を行う川原氏/2



かわ ほうら なお ゆき
川原 尚行 特定非営利活動法人ロシナンテス 理事長

北九州市出身。1992年九州大学医学部を卒業後、1998年外務省に入省。外務省医務官として、タンザニア、スーダンなどの日本大使館勤務を経て、2005年1月に退職。その後、2006年5月に「ロシナンテス」を設立。活動は難民キャンプでの巡回診療や学校の建設など多岐にわたる。

推薦者 **紀伊國 献三** 財団法人笹川記念保健協力財団 理事長